

不慮

吉崎武郷

——死ぬ、眠る、それきりのことだ。でもその死といふ眠りの

なかでは、どんな夢がみられるだらう？——

ハムレット

あの折持つてゐた黒い小さな手帳がみあたれば、はつきりわかるんでせう。いや、わかるといふのは日附やら時間やらのことで、事柄自体の意味は、それはもう誰にだつてわかりやしないんでせう。なにことか、僕はそのノオトにくどくと稽きつけたのだつたけれど。それも、なくなつてしまつたらしい。とにかく、細い雨の降つたり止んだりの晩夏の午後だつたか。僕は急行列軍に乗つて、熊本市を發ち伯父の處へ相談にゆくところだつた。前に坐つてゐた、汚い軍服の爺が、見事な美しさに鄙く大きなむすびを頬張つてゐたから、それは多分お盡を過ぎて問もない頃だつたらうか。車内はひどくがらんとしてゐた。がそんなことはどうでもよいのだ相談といふのは病院に入院することについてです。僕は永い間肺が悪かつた。兵隊にもゆけなかつた。それは幸ひだつたが、肺が悪いためにずいぶん人知れぬ苦勞を味はつてきた。肺病のみならず、軀の病弱といふことが、なんの言ひ譯にもならぬ脆弱な時代だつた。肉体的精神的に過重な負擔は、戰爭中假借なくのしかよつて僕を苦しめた。僕はひいひい悲鳴をあげながら、やつとのこと、お先眞暗なその日暮しをしてゐた。病氣の進行状況やらどうにか戰爭が終つたといふ氣落ちやらで、もうこれ以上働く氣根が盡きたかみえ、僕は北滿から引揚げてきた唯一の肉身である伯父の許に相談にゆくころだつたのです。僕は熊本市の市電の運轉手をしてゐた。急行列車は驛の構内に入ると、いくつもの鐵路のなかのひとつを選んで、急に激しく横揺れしながら、速度を落した。「ざつしよのくま」といふ驛名が視野を過ぎた。僕は、安物の登山帽を膝の上に丸めて、額を窓硝子に押しつけて、疲れた容子をそのまゝ、とろんと外を眺めてゐた。すうつと、自分の動きに平行して、くりのべられてゆく目の下のレールの感じはなつかしいものです。僕はよく運轉竈でかろした感じを味はつたことがある。もうちよつと二度と此方へは出てこ

れないやうな醫者の口ぶりを思ひ出すと、さすがに心細く、雨に濡れた鐵路の光つてゐるのが、寂しいやうな冷たさに研えてゐる感じだつた。僕は腹もへつてゐたのです。胃腸は丈夫だから、これまで勤務にこたへられたのだと思ふ。下宿で寝つくやうになつてからは、買出しにゆかねので、いつも情無いほど腹はへつてゐる。だからそんな恰好で外を見てゐたのは、前の軍服爺のむすびをみると、どうしても生唾が出てきて困るからであつた。しかしまたこゝ數ヶ月といふもの、しよつ中胸のなかとびゆうびゆう鳴つて血腫く、煙草にむせて強い咳をしたりすると、すぐ血痰や血泡が出るから、そのときは、窓を開けて吐くやうにしてゐたのです。夜明前の出發だつたからめしを炊く間もなかつた。それに、實をいふと何時も組になつて、ちよくちよく切符の賣上げのなかとら何枚かの紙幣をスライドすることからするべつたりの腐れ縁にたがつてゐる車掌の細木原あつ子が、昨夜別れにきて泊つたのだが、今朝になつて五十圓ほど手渡したとけで旅の仕度をしてゐる僕を白い眼をむいて寢床のなかとら睨みつけるだけだつたのを、舌打したい氣持で反芻してもいたのです。夜びて咳込み、精も根もつきはてた僕に、豚の様なこの女は、まだ何を求めるといふのかと、僕は脂ぎつて太い女の腕や胸を押しつけたのだつた。しかしまあ五十圓がある。僕は（借りておく）と荒い言葉で云つておいた。博多にでも着いたら代用食辨當でも買うつもりだつたのです。

急行列車は、「ざつしよのくま」を通過するところだつた。雨はあがつてゐたが、小止みになつたくらゐのところ、またぢき降るだらう。列車の震動が、固い木製のボックスに据えた肉の削げた尻から全身にしみわたつた。

驛の建物を見送つて木柵に沿ひ、列車は柵内を出外れようとしてゐた。鐵路は複線になつた。すると、急に、白い影が暗綠色の空氣のなかに飛込んできた。僕は眼を見張つた。硝子越しに、それは白いドレスを輕快に着込んだすらりと上背豊かな少女であることが知れた。列車の進行方向にむかつて右側のレールの間を、左の胸前に風呂敷を抱き、右手にきりつと巻いた青色の晴雨兼用のパラソルをぶらさげ、俯向勝ちに肉付のいゝ脛をゆつくり大腿に運んでゐる。さあ、十八、九位のところでせうか。丸顔のぼちやつとした愛嬌のある顔が、つまらなさに、すぐ傍を走つてゆく急行列車の窓々を折々見上げる——どういふんでせう、無心な顔とは云へぬかしれん、乗客がのぞいてゐるといふ自意識を持つてゐるに違ひないのですから。ちよつと、かう、おすまし氣味かもしれないのですね、少女特有の。だけど、可愛らしい顔立だつた。頬がひろく、眼の大きな、鼻筋の通つた、といへばおきまりの描寫だが、實際なんだから仕様がなない。下唇をちよつと噛んで幾分上目使ひで見上げる。髪は上品な内カールで、襟のあたり、なにやら手の込んだレース飾がついてゐたし、

肩の寄襲が高くとつてあつて、なかなか瀟洒な身なりだつた。それと、血いろ淡いふくよかなふくらみはぎ、短いソックス、白ブツクの運動靴、もういふ少女の姿が、雨で洗はれた枕木や石の黒さ、木々の深い緑、薄暗い顯つた空氣、それらを背景として非常に鮮かに清潔に映えて見えたんです。たて込んだ街中の不潔は下宿の三疊で腹を返した蛙のやうにのびて、頭だけが火の様に現實の痛苦を丹念に調べあげてゐるどうにも動きのとれぬ四週間の日々に、僕はこの世の地獄を味はつたのです。この思ひがけぬ少女の像は、この瞬間までぬきさしならぬ暗鬱な心像ととりくまねばならなかつたさうした僕の全身に、強い印象を刻み込んだ、と云へませう。僕は遠離つてゆく少女を、額を窓硝子に押つけ押つけして見送つたのだが、氣の故か少女は、ちらと僕の方を見た。それからすすぐ足許に眼をおとした。僕はふと醜惡な細木原あつ子の肉塊と離れることの出来た歡びを感じたのだが、實に、その時なのです。突然、僕は黒い大きな影が、音もなくすると少女の背後から近着いてきてゐるのに氣付いたのです。この不意打は、どんなに僕を驚愕させたことか。巨大な蛇のように、まるで音もなく、なめらかにそれはレールをすべつて追つてゐたのです。僕は、いきなり窓をひきあげ、半身を乗出さんばかりに突出した。空の客車だつた。六、七輛連絡した後、汽關車がついてゐた。線の入替で逆行してゐるに違ひない。僕は、すべての事情を了解した。僕は仰天した。むすびの軍服爺は赤忙かぶつくさ呟いた。僕はうめいた。手を振つた。全身が震えた。聲が出ない。少女の後方十間くらゐに追つてゐるぢやないですか！僕は手を振つて、泣き出しさうな叫びを喉の奥から掴み出さうとしてもがいてゐた。急行列車の轟音の故と、まさかそれに平行して列車が同じ方向に走るなどは、豫想も出来ぬ安堵感から、少女は平氣でゆつくり歩いてゐる。枕木をひとつひとつひろつて、踏んでゆくのらしい。あと、三間くらゐになつた。僕はその時、その空の客車が、ひどくのつぼであるのを知つた。レールから床が高いのに意外な思ひをし、尙且その客車のデツキに、右手と右足でぶらさがつて、ぼかんと此方を見ながら、青い幟旗を絶えず緩慢に上下に振つてゐる若い鐵道員をみて、はよんとなにか顔く思ひで、太平樂らしい彼の陽灼けじた蓋顔を眺めた。人間の意識の底流には、どんな夾雜物がひそんでゐるといふのでせう。それは勿論毛ほどの時間で、僕は、事態の急から身をひいたのでもなんでもない。罵聲でも、怒號でも、悲鳴でも、なんとか口をついて出さうなものぢやないですか。阿女つちよ危い！赤旗赤旗！とか、

馬鹿野郎！とか、退かんか！とか、云へさうなものぢやないですか。それが、云へないんだ。僕は、すつかり肝を潰し

てしまつたんでせう。もはや、避けがたい少女の運命を僕は鉛を呑むようにのみ込んでもの云へなかつたのでせう。一
 間位に追つたとき、急行列車は、二十間以上も少女を置去つてゐた。が、しかし、少女は、その時、たゞ一つ開いた窓と、
 そこから出てゐる僕の半身の狂ほしい表情を確かにみた。はつきり、僕はあの少女が僕を認めたことを知つてゐる。そし
 て、一秒か半秒の後、床の高い客車の連結器で、背後からつきとばされた。その瞬間の姿勢が、いかにも少女少女した姿
 であつた。がくつと仰向いて髪がはつとはねあがり、三十度位傾いた軀が、空へ飛立つ白い鳥かなにかのやうに、ふわつ
 と足が地を離れた。風呂敷包が前方に、そして右手にバラソルがくるまはつて飛んだ。いちど枕木につかうとした軀
 が、矢継早な二度目の衝撃で前につんのめつた。右側へ、丁度レールのうへに乳房の下あたりがきて、俯伏せに倒れた。
 間髪を容れず、

最初の車輪がかゝつた。少女は、咄嗟に胸をせらし、頭をぐんとのぞけさせた。脚が高くはねた、ドレスの裾が白い鳥
 の羽博きにも似て。……鈍い、不快極まる重い音が、僕の脳の奥で聞えたやうな気がする。ざくつーといふやうな音。空
 の客車は、見てゐて、ちつとも持上りもどうもしなかつた。最初の車輪が脚を乗切ると、少女の軀は、車輪について廻轉
 し、凄まじい急ひで仰向けにされた。無惨な音！すぐさま、次の車輪が、同じ様に、少女のまだ温い軀を裏返しにした。
 「ざつしよのくま」を外れてしばらくすると、レールはゆるやかに右へ迂曲してゐる。僕は、それで、そこまでしか見
 なかつた。少女の軀は、まだすつかり二つに切断されてはゐないらしかつた。僕には、つきとはされたときの少女の表情
 はもう見えなかつた。しかし、咄嗟に窓から身を乗出した苦し氣な僕の容子と、背部の強打とか、あの少女の生の奥深い
 ところで、結び合はざる余裕があつたのではないか。少女は聲をあげなかつたやうだが、それと直覺した少女の稚い
 ちの叫びは、どういふのだつたらうか。レールのうへに墜れるときの、あの少女の聲にならぬ絶叫の意味は、なんであつ
 たか。十八年かそこらのあの少女の生涯は、あゝも無慙な終幕となつたが、それはいつたい何者の什業であるのか。あの
 少女をはぐくみ育てよきた者たちは、この瞬間何處で何をしてゐるのか。あの少女を愛する男がゐるとしたら、彼はどう
 してゐたといふのだらう。あんなにもあつけなく、少女のうへに落ちてきた死とは、一体何だといふのです。僕は氣の狂
 ひさうな虚しさのなかで、なにものへとも知れぬ涙をながし、息を詰め、どすんと固いボックスへ尻を据えた。なにも見
 えす、何も聞えず、かうして敲々たる急行列車に身をまかせてゐる自分であることさへ忘却した時間が過ぎた。僕は、し

かし、間もなくさういふ状態から無理強ひに覺醒させられた。

目の前のあの軍服とにぎりめしの爺が、その皺苦茶な顔を悪意と輕蔑に歪め、憎惡のこもつた鼻先に小皺をよせて、僕の膝を自分の膝で二度三度と次第に強くこづくのだつた。僕は氣がついた。兩頬に垂れ流れる涙にこの爺は氣がつかぬのか。だが僕は爺のさういふ表情を單にひとつの意味にしかとつてゐなかつた。窓を締めなければならぬと、僕は身を起さうとした。しかも僕の軀は何故か一寸も動かぬのだ。全身の關節が外れてしまつたかのように。爺は唐突な所作で立上り胸まはりをパタパタとはたき、わざと兩肩をいからせ、肘を張つて窓を下ろした。そして、かう云つた。

「へッ、をなごさへみりや……」

僕は、呀つと思つた。眼を閉ぢた。そのまゝ僕は、急行列車が關門トンネルを潜るまで、うつらうつらと熱病患者のようになにか考へねばならぬことを豫期しつゝ何も考へずにすごしてしまつたのだつた。

僕が、細木原あつ子との間に持つたやうな穢れ腐つた青春の斷片を、ゆきずりの車窓から、あの鮮やかな少女の頭上により撒いたとしたら……否、あゝした車窓の僕から、あの少女が、さういふものとしてのからかひを受取つたのであつたのなら……あゝこの考へはどんなに僕を苦しめたことか。今も尙、この考へが僕を苦しめる。

僕は、こゝまで、あの黒い手帳なしのでべてきたが、かりにあの手帳が失はれずあつたとて、これ以外の何をのべるこゝとが出来たらう。死にまつはる屬性を切すてゆけば、何が残るのか、それとも、一足飛びにそれらの迷妄、悲哀、恐怖、苦惱を飛越して、ハムレットのあの呟きにゆくとしても、そこにながあるだらう。僕は、醫師から、このまゝ勤務を續ければ半歳で死ぬかも知れぬときつゝ云ひ渡されて、狼狽して逃げてゆく途中なのだが、しよせん、四角いつぼの黒い影は逃れる術なく、いつかどーんと突飛ばされてしまふのだらうか。一寸とした注意で、僕は僕の電車が、あゝしたことを仕出かすのを避けることが出来たと自惚れてゐたのだが、しかし、その考へに、どれ程の權威があるのかいまは疑はねばならぬ。いま僕は、急行列車をぼかんと眺め乍ら帝旗を振りつゞけた若い鐵道員に向つては、はななく軍服の爺のあの思ひ懸けない呟きに向つては、はななく、耐え難い苦しさ、憤ろしさを覺える。それはたしか。奴等の出鱈目について、はななく、出鱈目の偶然で、あんなにも可憐な生命が、もろくも消えてしまふといふことについてなのだ。僕のこの苦しさ、憤ろしさを覺える心はハムレットの素朴な呟きまでにも到り得ない、自身の卑小さの故なのであらうか。